法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

ミロク信仰 ： 沖縄と韓国のミロク説話の比較研究

田畑, 博子 / TABATA, Hiroko

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
29
(開始ページ / Start Page)
57
(終了ページ / End Page)
90
(発行年 / Year)
2003-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002738

Hosei University Repository

ミロク信仰
沖縄と韓国のミロク説話の比較研究

田畑　博子

一　はじめに

古代アジアに流布した弥勒信仰が、どのようにして中国、朝鮮を通じて日本に伝来してきたか。そしてどのように変容してきたか、非常に興味深い問題である。ここでは特に沖縄において、どのように受容されていったかを考えてみたい。この仏教の「弥勒信仰」については、さまざまな研究が先学によってなされている。ここではこれら仏教の「弥勒信仰」についてではなく、日本独自の固有の信仰と結びついて多様に変容してきた、民間信仰の「ミロク信仰」について考察したい。これはいわば規格品としての弥勒信仰ではなく、原形をとどめることもなく、はるか海の彼方からやって来て、豊

Hosei University Repository

饒を約束する来訪の神としてのミロク信仰の伝播について考えたものである。その中でも沖縄、朝鮮の説話を中心にこの問題を考えてみた。

二　柳田国男の「みろくの船」

まず最初にこのミロク信仰に、仏教に基礎を持たない信仰としての指摘をしたのが、柳田国男であった。彼は「みろくの船」[1]の中で、次のようにいっている。

西方の弥陀の浄土に押しせばめられて、弥勒の天国はだんだんと高く遠のき、そのまぼろしはいよいよひそやかになって、そこに往生を期する者も今はいたって稀であるが、不思議にこの邦ではあちらからの消息が絶えず、それも現世の果報に結びついて、墓とも寺とも縁のない一種の東方仏教が、国の隅々には成長している。

ここで柳田国男は、『利根川図志』の弥勒謡をきっかけにその変化した信仰を、はるか南の島に残る弥勒踊りと結びつけ、海上の浄土について示唆を与えている。[2]

三　酒井卯作の「ミロク信仰の流布と機能」

また酒井卯作は、「ミロク信仰の流布と機能」[3]の中で、八重山地方に今も残るミロク信仰について、

（一）ミロクの信仰は大陸より琉球列島に伝播した。

（二）琉球列島には、もともと来訪神神の行事が濃厚で、ミクロ下世の信仰は容易にこれと融合することができた。

（三）琉球列島のミロク信仰はさらに、漂流などの原因で鹿島の岬に上陸した。したがって、鹿島踊などの形式は、南島に原流を発するものが多い。

（四）日本の各地の海辺には「寄り神」に信仰があり、鹿島でもこの信仰がミクロ下世の信仰を容易に受け入れる要素となった。

（五）内地のミロク下世の信仰と米との関係が密接であったとすれば、南島の豊作をもたらすと信ずるミロク信仰の影響である。

（六）内地のミロク下世の信仰は、その他のはなやかな文化とともに、南島にふたたび逆輸入された。

とこのように結論づけている。

四　鹿島踊と弥勒歌

鹿島踊や、弥勒歌に関しては、茨城周辺だけでなく、広島、九州にも伝承は残っている。[4]また当来仏としての弥勒は、能登半島でも「借金は弥勒の娑婆が来たら返す」などの言葉が多く残されている。[5]これらの伝承と伝播については、「鹿島の事触れ」がおおいに関係していると考えるのが自然であろう。「鹿島の事触れ」については、『岩波古語辞典』（大野晋編）によると、

Hosei University Repository

鹿島明神の御神託と称して、年の豊凶、天変地異等を誇張して触れて歩く、神主姿の乞食の一種。災い除けの秘符を売りつけた。

とある。江戸時代に生活のためにさまざまなことを占い、予言して諸国を放浪した祈禱師のことである。白装束の白丁姿で御幣を持って歩いていた。この人々がこの弥勒踊や、弥勒歌を持ってまわったと考えられる。

永田衡吉氏の「鹿島踊の考察」[6]によると、湘南鹿島踊をつぎのように解説している。

鹿島踊の始まりは、惟喬親王の御子が岩村の横店という家で死んだため、その御子を祭神として祀ったときからである。惟喬親王は、箱根ロクロ師の祖神であり、岩村の児子神社は、ロクロ師か石匠の祀ったものではないだろうか。また石材や、鉄礦を取り扱った人々の存在や、吉浜海岸の砂鉄や鍛冶屋という地名、数多くの御神体の漂流伝説などから、[7]湘南の鹿島踊は、鉱産と林業を求めて厳しい戦いをつづけた工匠、移民たちに信仰の糧を与えた芸能なのであった。

ここで永田氏は、伊勢、住吉、鹿島の三大社が、疫病払いの神人、神楽、獅子舞などを巷間に送ったいわば供給地であったとしている。[8]そして鹿島大神は鹿島土着の以前は、塩竈にあり、[9]鹿島に移ったあと、神宮の周囲には占部一族が住み、この仕事に従事したと『風土記』より指摘している。[10]また和歌森太郎氏は、「近世弥勒信仰の一面」の中で、『日本歌謡集成』(第十二　近世篇)より広島県賀茂郡の例を紹介している。[11]

正月の元日の明け方、被差別民たちが集まり、各戸口で次のように唱えた。

五十六億七千十万歳、弥勒出生さん夜の暁、畝の真砂が谷へ下り、谷の真砂が畝へ上がりて大盤石の巌となりて、君王子の御万歳と、さしに栄えて楊柳の影向云々。

これらの指摘により、弥勒踊の伝播には多くの神事にまつわる人々、それも定住して生活の糧を得ることのない人々が関わっていることが分かる。

しかしこれら相模湾西海岸の神奈川県小田原地方から、静岡県賀茂郡東伊豆町までの二十二地区に分布する(『日本民俗大辞典』)[12]といわれる鹿島踊りと琉球に伝わるミルク信仰とどのようにむすびつくのか。酒井氏の指摘のように古来より日本は海の彼方よりの来訪神の存在を信じてきた。民族の自身の由来に関しての無意識の帰結かも知れない。また酒井氏の「外来の思想に由来するミルク下世の信仰が、なぜ大陸と反対側の東方の海辺の片すみに発したのであろうか。つまり「流れ」としてのミロク信仰の問題であり・・・」という発言のとおり弥勒踊、ミルク、鹿島踊のそれぞれの発展は謎である。

五　宮田登の「ミロク信仰の研究」

宮田氏は日本の民俗宗教としての弥勒信仰は、どのように位置づけられるのかという問いに対して、「世直し」という言葉に集約されていると発言している。「弥勒信仰研究史の回顧と展望」[13]の中で宮

Hosei University Repository

田氏は、鹿島と琉球のミロク信仰についてつぎのように述べている。

つまり「世直し」神が、鹿島の地に、遠く海上のかなたから訪れてくるという基調が、「弥勒の舟」のモチーフにはある。ここで「世直し」神と弥勒下生とが、鹿島の地で習合することが当然予想されるのであるが、柳田はもう一つ別の側面を思考していた。それは「仏教の基礎をもたぬ弥勒」の存在であった。その手掛りは、南島に行われる弥勒踊であり、沖縄の八重山や宮古島の古伝に残っているニライカナイから訪れる来訪神たちのイメージである。

ここで問題になるのが、やはり伝播の問題である。大浜用倫氏によると八重山の弥勒踊は、十八世紀後半に安南よりもたらされたことになっており、[14] また酒井卯作氏は中世にすでに首里の赤田に弥勒会があったとしている。[15] そしてこの弥勒会が、京都、鎌倉で行われた仏会の形式の伝播という比嘉盛章氏の説をあげている。これらに対して宮田氏は、沖縄の伝統的な来訪神のイメージが本来基礎にあって、弥勒下生がそれに習合し、さらに潮流にのって、鹿島に伝播し、さらに南島に逆輸入されたという酒井氏の説を、変遷のスパンについては判断しにくいとしながらも首肯している。[16]

これとは別に、宮田氏は鹿島踊と、弥勒踊の相違をあげている。鹿島信仰と弥勒信仰が混然となった時期があり、鹿島踊りの歌詞の中に弥勒踊という章句があるので紛らわしくなってしまったのだが、宮田氏によると、[17]

弥勒踊は鹿島踊のように若者中心の踊りではなく、老婆たちの祝事のあるおりに踊られる。そして基本的には弥勒浄土を讃える讃仰舞踊である。それに対して鹿島踊は疫病除去の呪法があるにもかかわらず、現在ではその要素が発見できない。歌詞は「弥勒の舟」の到来を願う内容となっている。弥勒踊の古い形は、鹿島神宮の周辺にも分布しており、関東、中部地方の内陸部に広まっているのに対して、鹿島踊を打ち出した弥勒踊の方は、太平洋沿岸を南下して分布している。

とこのように分別している。

六　沖縄の弥勒歌

ここでいう弥勒歌という呼称は、弥勒の詞章が入った歌という意味で用いている。現在沖縄では八重山諸島をはじめに、本島の大宜味村などの種取り祭、豊年祭で弥勒に会うことができる。本島の首里の赤田でも旧暦八月十六日に弥勒祭があった。その名残は那覇のジュリ馬などの行事にもある。鳩間島の場合、ミリクといい、旧暦の六月に五穀豊穣を願うために行う豊年祭の行列の中に弥勒はいらっしゃる。ここでは、

みりくゆやいもち　あしばばん　あしび　ぶどうらばん　ぶどうり

（弥勒の世が来た。遊んで遊んで、踊って踊ろう）

というみりくぬうたを歌う。また西表島祖納では、正月に行われる節祭（シチィ）の中にミリク行列

Hosei University Repository

がある。

この弥勒に関する歌が沖縄の中でどのような広がりを持っているか、『南島歌謡大成』[18]から弥勒という詞章を持つものを抜粋してみた。

沖縄

①	ウムイ	一九四	塩屋海神祭のオモイ〈田港アシアゲにて歌ふもの〉
②	ウムイ	五〇五	パーシのウムイ〈大宜味村〉
③	屋嘉比朝寄工工四	三六	口解
④	琉歌百控	九一	弥勒節
⑤	琉歌百控	九二	弥勒節
⑥	琉歌大歌集	二四〇	
⑦	古今琉歌集	一一九六	
⑧	古今琉歌集	一一九七	
⑨	古今琉歌集	一一九八	
⑩	古今琉歌集	一四四一	
⑪	琉歌全集	八二九	
⑫	琉歌全集	八六〇	

宮古島

⑬	ピャーシ	一二	麦まつりの神はやしの歌（城辺西東）
⑭	ピャーシ	二〇	夏穂祭りのぴゃーしぐい〈女〉（大浦）
⑮	ニーリ	三	来間島やーますぶなかのにーり（来間）
⑯	アーグ	九〇	大世栄え
⑰	クイチャー	二六	十五夜のアーグ（狩俣）
⑱	クイチャー	二七	豊年の歌（狩俣）
⑲	クイチャー	四七	アマゴイコイチャ（雨を乞うこいちゃ）（伊良部）
⑳	トーガニ・ジュンカニ	七二	トーガニ（宮古）

八重山

㉑	ニガイフチィ	四一	種取りいぬ神願い（石垣）
㉒	ニガイフチィ	四五	草葉願い（石垣）
㉓	ニガイフチィ	四七	穂ぬ願い（石垣）
㉔	ニガイフチィ	一〇二	弥勒願い口〈神口〉（竹富）

Hosei University Repository

㉕	ニガイフチィ	一四二　長月祝（竹富）
㉖	アユー	二六　角皿ぬあよう（西表）
㉗	アヨー	三七　世むかいの唄（竹富）
㉘	アヨー	五八　種子取り道唄（黒島）
㉙	ジラバ	一一　とうんぎゃーら（石垣）
㉚	ユンタ	一四二　豊年祈願の神歌（西表） （赤またー黒またーの各戸を訪れる時の神歌）
㉛	ユンタ	一九四　とんちゃーま（竹富）
㉜	節歌	四八　千鳥節
㉝	節歌	八三　みろく節
㉞	口説歌謡	三　宮良口説（石垣）
㉟	口説歌謡	一九　波照間口説（波照間）
㊱	口説歌謡	二二　ゆがふ口説（与那国）
㊲	その他豊年祭の歌	七　ありぬ渡からの歌（石垣）
㊳	その他豊年祭の歌	三一　巻踊歌（黒島）

㊴	その他節祭の歌	三　舟乗りの歌（西表）
㊵	その他種子取祭の歌	一　世乞ちいじい（石垣）
㊶	その他種子取祭の歌	四　しきどうよう（竹富）

このような結果が出た。沖縄は一二首あったが、うち一〇首は琉歌となっている。あとの二首は、大宜味村のウムイである。この二首は、弥勒世果報という常套句的、慣用句的な使われ方をしている。（なお大宜味村は数年前より一度途絶えた豊年祭が復活し、弥勒の行列も行われている）宮古島は八首であったが、このうち五首は多くの神々が列挙されている中の一つとしての弥勒があった。そして残りの一つは常套句として使われ、あとの二首は豊年を祈る対象として弥勒が表れている。また奄美には弥勒に関する歌は見られなかった。

特徴的な表れ方をしているのが八重山諸島である。ここでは多くの神々のうちの一つとしての弥勒の存在はない。すべて単独で弥勒を崇めている。ぜんぶで二一首あるが、すべて豊年を願う対象として表れている。そして来訪神としての弥勒を表現する歌が、五首ある。そのうちの二首をつぎに紹介する。

ニガイフチイ　一〇二　弥勒願い口〈神口〉（竹富）

Hosei University Repository

一　天国　大国　ういやまとう　たんやまとう
はなぬみやく　ばたりおーたる　みんな加那志ぬ前
（天国　大国　上大和　たん大和　花の都から　渡って来られた水納加那志の前）

二　竹富ぬ　元ぬ島に　おーり
信じ念じらりおーたる　島ぬ主ぬ　神ぬ前
（竹富の　元の島に来られ　信じ念じられなさった　島の主の神の前）

ジラバ　一一　とうんぎゃーら（石垣島新川村）

一　東方から　来る舟　我がういぬ　とうんぎゃら
シーヤ　アミシャ　世ワ稔ル
（東方から来られる船は　わが上の神船）

二　うはらから　来る舟　我がういぬ　とうんぎゃら
（ウハラ〈東〉から来られる船は　わが上の神船）

三　弥勒世どう　乗せ来る　ばがういぬ　とうんぎゃら
（豊年の世を乗せて来られる　わが上の神船）

四　神ぬ世どう　乗せ来る　ばがういぬ　とうんぎゃら
（神の世を乗せて来られる　わが上の神船）

五　何処　何処どう　舟着やる　ばがういぬ　とうんぎゃら
（どこどこが船着き場である　わが上の神船）

六　村の前どう　舟着きやる　ばがういぬ　とうんぎゃら
（村の前が船着き場である　わが上の神船）

七　粟つくどん　米つくどん　世ば稔り
（粟を作っても　米を作っても　世は稔れ）

※豊年祭（ぷーり）の時に謡われる。神迎えのジラバである。

このように沖縄本島、宮古島ではすでに弥勒という言葉が豊かな実りを意味する慣用句になってしまったのに対して、八重山諸島では海の彼方からやって来る神としての位置をいまだ保つ生きた言葉として使われている。それは「天国　大国　上大和　たん大和　花の都から」という詞章や、「東方から来られる船は」という詞章からも、ニライ・カナイ信仰と結びついていることがいえる。

一五三一年に成立されたとする『おもろさうし』の中にも一首、弥勒を詠んだものがある。三七五番である。

一　弥勒　見ちへ　和る
此の　生まれど　弥勒
此御神酒　ぬき上げわちへ

Hosei University Repository

世は　ちよわれ
　又　今日の良かる日に
今日のきやかる日に
　又　上の世の門や
　　下の世の門や

これは五穀豊穣をもたらす神として弥勒をお迎えし、御神酒を差し上げ、豊年をお願いする歌であろう。ここでは弥勒は弥勒として表現されている。豊年が実現したすばらしい世の中の比喩としての弥勒ではない。

この他に沖縄本島での弥勒信仰があったことがわかる首里赤田の弥勒の歌がある。

赤田首里とのち　こかね燈炉さけて　おれかあかかれは　弥勒御迎

「古今琉歌集」

沖縄本島での弥勒行列は、豊年祭や種取祭と結びついて、この他にも国頭郡東村、大宜見村や、金武町などにもあり、もともと琉球のところどころにもあったと考えても不思議ではない。これは前述した『南島歌謡大成』の歌からもいえるが、中国や朝鮮から伝わってきた弥勒信仰が、基層としてあったニライカナイの信仰と結びついて、豊年祭（プーリ）のミルクになったと考えられる。これらを八重山諸島で独自に発展したものとみるか、八重山に残されたものとみるかについては、後者を取りたい。しかしまた、定着した後にそれぞれの発展は当然のことであろう。そしてさらに弥勒がなぜ布袋の形をしているかなどの疑問があるが、中国でも布袋は弥勒の化身として認識されていた。金三龍氏によると、「弥勒仏、一名布袋和尚、或称弥勒菩薩・・・」という。[19] 本土でも鎌倉時代から禅僧の間でも布袋の化身と見られるようになった。[20] その後七福神の一人として風流に登場するようになった。[21] 沖縄のスネーイは、本土の風流の影響であるという折口信夫の指摘もある。[22] そして折口が沖縄を訪れたときに「にんぶちや」の京太郎の念仏にも注目している。これらより沖縄の弥勒信仰は、沖縄本島にもあったが、しだいに衰退して先島である八重山諸島で伝承されているということがいえる。

七　韓国の創世歌

韓国には創世歌と呼ばれる話がある。巫俗神話として有名なものだが、シャーマンによって語られるというより、謡われるものなので歌と呼ばれるのであろう。つぎに紹介してみよう。

創世歌（弥勒様とお釈迦様）

胎初（最初）、天地は混合して区別がないまま、暗闇の混沌とした状態であった。この混沌から天と地が分かれて開闢したが、天から朝露が降りて、地からは水の露が湧いてきた。そして陰陽が相通じて開闢が始まった。そこで天は甲子年、甲子月、甲子日、甲子時に子の方向に開き、土は乙丑年、乙丑月、乙丑日、乙丑時に丑の方向に開いた。その後天はだんだん明るくなって、

Hosei University Repository

青い色を帯びた。そして天の上にも三つの天、土の上にも三つの天、地下にも三つの天。このように三十三天に分かれ、土は最初、白砂地から山ができ、その山から水が出て、草木が芽生えるようになった。

このとき、世の中には太陽もなく、月もなかったので、昼と夜、すべて真っ暗な暗闇で、人間は東西南北を区別できなかった。そのうちに南方国の日月宮に、前の額、後ろの額に目が二つずつある青衣童子が湧いてきた。そこで天の王皇から二人の守門将が遣わされ、青衣童子の前の額の二つの目を取り、西方摂帝の土地で天に祝手をしたら月が二つ湧いてきた。そして世の中が初めて明るくなった。ところが太陽と月が二つずつだから、昼間は太陽が強すぎて人々は焼かれて死に、夜は月の光が強すぎて凍え死に、人々はどうしても生きていけないはめに陥った。このとき天地王がこの世に降臨した。

天と地ができたころ、弥勒様が誕生した。天と地が互いにくっついて離れないから弥勒様は地の四隅に銅の柱を立てて離し、天は鍋の蓋のようにした。そのころは太陽も、月もそれぞれ二つずつあったが、弥勒様は太陽を一つ離して北斗七星と南斗七星を作り、月を一つ離して大きな星と小さな星を作った。そして大きな星は王様と大臣の星にして、小さな星は農民の直星にした。

弥勒様は服がないので、服を作ろうとしたが、布がなかった。それでこの山、あの山にのびている楠の木を伐り、皮を剝いで繊り、茹で、天の下に機織り機をおいて、雲の中でアゼ糸をかけてカタンカタンとおろし、カタンカタンと出して、ようやく長い着物を作った。着物は全匹の長さで、半匹が袖で、五尺が袂で、三尺が襟であった。頭巾を一尺三寸で切って作ったら、目の下にもかからないし、二尺三寸で切って作ったら、耳の下にも来ないし、三尺三寸で切って作ったら、顎の下まで来る。

弥勒様の時代には火がなかったので、生食をしていた。火をおこさないで、穀物を生で食べていた。弥勒様は一俵ごと、一升ごと食べた。しかしそうしていてはだめだと思った弥勒様は、水の根本と火の根本を探すことにした。それで草のイナゴを捕まえて、はりつけにしておいて、膝元をたたきながら、水の根本と火の根本を知っているかと聞いた。草のイナゴが答えるには、

「夜になると露をもらって食べ、昼になると太陽の光をもらって食べて生きている獣に、どうしてわかるのでしょうか。私より先に見た草のカエルを呼んで、たずねてごらんなさい」

弥勒様は草のカエルをつかまえて、膝をたたきながら聞いた。草のカエルが答えるには、

「夜になると露をもらって食べ、昼になると太陽の光をもらって食べて生きている獣に、どうしてわかるのでしょう。私より二、三回先に見た小鼠をつかまえて、たずねてごらんなさい」

弥勒様は小さな鼠をつかまえて、膝をたたきながら聞いた。小鼠が答えるには、

「私にどんなごほうびをくださるのでしょうか」

と。弥勒様は、

Hosei University Repository

「おまえに天下の倉庫を示すようにしよう」
と言われて、初めて小鼠が答えるには、
「クンドシ山に登って、片手に小石、片手に鉄を持ってトントンたたいたら火が起こるし、ソハ山に登ったら、湧き水が湧いてくる水の根本がありました」
弥勒様は水と火の根本をこのようにして知った上で、人間を造った。
むかしむかし、おおむかし。弥勒様は片手で金の皿を持ち上げて、もう一方の手で銀の皿を持ち上げて、祝詞を奏上したら、天から虫が金の皿に五匹、銀の皿に五匹落ちてきた。その虫が大きくなって、金の虫は男になり、銀の虫は女になった。彼らが成長して夫婦の縁を結び、世の中に人々ができるようになった。弥勒様の時代は、俵ごと、升ごとに食事をしていて、人間の世界は太平であったが、お釈迦様は弥勒様の時代を奪おうとした。弥勒様が言うには、
「まだ私の時代であり、おまえの時代にはならない」
お釈迦様が答えるには、
「弥勒の時代は既に過ぎ去った。これからは私の時代が始まる」
弥勒様が言うには、
「おまえが本当に私の時代を奪おうというのなら、おまえと私は競争をしてみよう。この汚くずる賢い釈迦よ」

こうして東海の中で、弥勒様は金の瓶に銀の縄をつけて競いながら、言い渡した。
「私の瓶の縄が切れたらおまえの時代になり、おまえの縄が切れたらおまえの時代はまだ来ないと言うことだ」
東海の中でお釈迦様の縄が切れたので、お釈迦様は降参したが、次の新しい競争を提案した。今度は成川江を真夏に凍らせるというものであった。弥勒様は冬至の祭祀を行い、お釈迦様は立春の祭祀を行ったが、今度もお釈迦様が負けた。それでもお釈迦様はあともう一度やりましょうと頼んだ。今度は二人が同じ部屋に横になって、牡丹がじわじわと咲いて膝に上ってきた方が勝ちということになった。お釈迦様は泥棒の心を持って狸寝入りをし、弥勒様は深い眠りについた。ようやく弥勒様の膝の上に牡丹の花が咲いて上ってきた。するとお釈迦様はひそかに真ん中を切り、自分の膝に挿した。弥勒様は目を覚ましてお釈迦様を罵った。
「狡くて汚いこの釈迦よ。その花は私の膝に咲いた花を切って、君が自分の膝に挿した花だから、十日も生きないだろうし、植えても十年は生きないだろう」
お釈迦様の度を過ぎたしつこさにうんざりした弥勒様は、お釈迦様に時代を譲ることを決心して次のように予言した。
「狡くて汚い釈迦よ。君の時代になると、門ごとに鳥居が立ち、家ごとに芸者が出て、未亡人が出て、巫女が出て、謀反を起こす人が出て、白丁が出て、障害者が出て、三千人の僧に一千人の

Hosei University Repository

乞食が出る来世になるだろう」

そう言った三日後に予言どおり三千人の中で一千人の乞食が出現したので、弥勒様は逃げてしまった。お釈迦様はお坊さん達を連れて弥勒様を探しに旅に出た。

ある山中に入ると、ノル鹿が一頭いた。お釈迦様はお坊さん達に、

「そのノル鹿をつかまえて、肉を三十の串に刺し、古い木を折って焼いて食べるように」

と言った。すると三千人の中で、二人が立ち上がって手に持った肉を土に落として、

「自分は聖人になりたい」

と言って、その肉を食べなかった。肉を食べた僧達は死に、山となり、岩となり、松の木になった。こんな理由で今でも人々は三、四月になると藍色の緑の中で花煎遊びを楽しむ。

『韓国の巫俗神話』金泰坤著[23]
金厚蓮・田畑博子訳

この話は釈迦が菩薩のころに、弥勒といっしょに修行している話である。弥勒は釈迦よりも早くに成仏できたはずなのにもかかわらず、釈迦の激しい真実の修行に追い上げられて、弥勒はいまだに修行の身であるという。弥勒は一生補処の菩薩で、現在仏である釈迦に対して、来世に仏になるという考えがある。それは現世に飽きたらず、来世に夢を託した民衆に期待されるべく存在した仏といえる。安永寿延氏は、「弥勒信仰と弥勒の世」[24]の中で、兜率浄土と阿弥陀（安養）浄土について、つぎのように述べている。

源信は『往生要集』において、慈恩から「末法万年には、余経は悉く滅し、弥陀の一経のみ、物〔衆生〕を利すること偏に増さん」（『西方要決』）を引用し、また懐感の『釈浄土群疑論』から極楽と兜率の優劣についての一二の論点を借りて、阿弥陀信仰に軍配をあげた。

このように源信は阿弥陀信仰の方が往生は容易であるということを受け入れたが、親鸞にとっては弥勒と釈迦の二元的並存の解決が重要な問題であった。

八　韓国の巫俗神話

韓国にはシャーマンによって神事の場で謡われる巫歌（ムガ）という叙事歌謡がある。パンソリと呼ばれる歌謡に比べ、厳かで崇高である。祭儀の場で歌われるので、神聖かつ呪術に富んだものである。韓国本土では「～グッ」や、「～プリ」と呼ばれ、済州島では「～ポンプリ」と呼ばれている。ポンプリの意味は本解で、ものごとの根元という意味である。この巫覡によって唱えられてきた創世神話は、韓国本土の「創世歌」型と済州島の「天地王ポンプリ」型に分けることができる。「創世歌」は、弥勒と釈迦が主人公で、天地の混沌を調整し、水と火、衣服、火食などの文化を創造しながら人の世を開いていく話である。そして「天地王ポンプリ」は、天地王が地上に下って神聖婚をし、帰った後に地上で誕生したデビョル王とソビョル王が、人世を治める話である。玄容駿氏は、済州島の創世神話

Hosei University Repository

の持つ神話素について、天地開闢と射陽神話との複合であるという。その神話素の一致する中国の南部、台湾、沖縄、東南アジアなどとの関連を指摘している。[25]

九　韓国の弥勒信仰

中国から伝来した弥勒信仰が、朝鮮半島に受容されていった時期について一番古い記録は、百済の弥勒仏光寺の寺跡碑で、「成王四（五三六）年に謙益をインドに派遣した」とある。さらに成王二十（五五二）年に、「王様が初めて日本に仏教を伝えようとして、仏像と仏典を送ったが、そのひとつが弥勒菩薩であった。」という記録もある。また高句麗の平原王十三（五七一）年に作られたとされる辛卯銘三尊像の銘文がある。亡き父母が弥勒に値遇されることを願う内容が刻まれている。そして千二百年代に成立したと言われる『三国遺事』の中には、「新羅の真智王の時、興輪寺の真慈という僧侶が、熊川（公州）の水源寺の弥勒に会いに来る」という記事や、「百済の武王は、王妃の善花といっしょに龍華山の獅子寺にお参りに行く途中、池の中から弥勒三尊が現れたので、弥勒寺を創建することになった」という弥勒寺の縁起説話がある。そしてさらに朝鮮での弥勒信仰を考えるとき、特徴的であるのが、花郎（ファラン）との関係である。

花郎とは、新羅真興王の時、貴族の子孫の中から優れた若者を選んで宗教的修練と、武士的訓練を行った青少年の集団をいう。その花郎をもって構成したのが花郎道である。この花郎道は弥勒信仰に

基づいた理念を国家の理想としていた。三品彰英氏の「花郎制度の本質とその機能」[26]によると、新羅の守護神霊は、叢林に出現するとともに、海の彼方からも来臨するものであった。浜辺で宗教的儀式を行ったという伝説が各地に残るという。また玄容駿氏によると、済州島にも海を渡ってくる神々の存在がある。そしてその神々の住む国は、「農業その他に関する重要な物資が豊かな国、人間生活に福利を与える神の国、海の彼方の楽土、他界」と規定している。[27]

その後時代が下がり、朝鮮時代になると崇儒抑仏によって上流層を通した仏教の発展が期待できなくなり、庶民層を通して展開をしていくしか方法がなくなっていった。また文禄・慶長の役などの戦乱と社会的な矛盾と抑圧にあえいでいた民衆の間に、末法的な時代を救済する未来仏として弥勒信仰が広まっていった。

一〇　沖縄のミルクとサーカ

沖縄にも韓国の創世歌と同型の昔話がある。紹介してみよう。

火種子〈ミルクとサーカ〉

むかし、ミロクのホトケと、シャカのホトケが「世の中」を奪う争いを起こして、どちらも譲りませんでした。そこで、ミロクのホトケがいいました。

「寝るとき、枕もとに花びんをおき、花びんに花が早く咲いた方の世の中にしては」ということ

Hosei University Repository

に、両ホトケの相談がまとまりました。そこで、めいめい花びんを枕もとに置いて眠りました。夜中のころにシャカのホトケが目を覚ましてみると、自分の枕もとの花びんにはまだ咲いていないのに、ミロクのホトケの花びんには花が美しく咲き乱れていました。シャカのホトケは、ひそかに自分の花の咲いていない花びんを美しく咲いているミロクの花びんと、とりかえておきました。それで、約束どおり、とうとうシャカの世の中になりました。そこで、シャカのホトケに世の中を奪われたミロクのホトケは、しかたなく、人類、獣類、昆虫類などにいたるまですべてのものに目を閉じさせてから「火の種子」をかくし、竜宮に立ち去りました。それから後は、火がまったくなくなったので、シャカのホトケはたいへん困りきってしまいました。シャカのホトケは、人類、獣類、鳥類、昆虫類など、生きているあらゆるものを集めて、ミロクのホトケが火の種子をかくしたところを尋ねました。だが、どれも、これも、

「目を閉じていたので知りません」と答えました。ところが、バッタが進み出て、

「私が知っています」と申し出ました。シャカのホトケは早く話してくれと頼みました。バッタは、

「わたくしは、羽で目をおおっていましたが、わたしの目は、下わきにあります。それで、ミロクのホトケが、石と木に火の種子をかくすのを見ました」といいました。シャカのホトケは、たいへん喜び、木と木をもみ合わせて火種子をとることができました。シャカのホトケは、バッタに

「よく見てくれた。その礼に、一ついっておくことがある。お前が死ぬときは、地面の上に死んで、アリなどに食われるな。木の枝や、草の葉の上死になさい」といわれました。そこで、この世の中でうそをついたり、貧しい者があったり、盗人が出たりするのは、シャカのホトケがミロクのホトケの美しい花びんを盗んで、自分のものにしたからだといわれます。一方のミロクのホトケは、正直でありましたから、楽しく暮らしたということです。

『奄美大島与論島の民俗語彙と昔話』栄喜久元著

この話のモチーフを見ていくと、基本的には①弥勒と釈迦の争い、②火の種の由来、（ここでは昆虫に聞くということと、ネズミの登場）③花をめぐる競争、④この世の乱れの原因という点にある。この話と創世歌とを比較すると同型の話であることが分かる。その他の話をあげてみる。

	ミロクとシャカ	土地争い	花	火種隠し	竜宮へ帰る	バッタ	脇	ネズミ
①	○	○	○	○	○	○	○	
②						○	○	
③	○	○	○	○		○	○	
④	○	○						○

Hosei University Repository

	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○
											○			△	
	○			○									○	○	
	○			○									○	○	○
	○			○									○	○	
		○				○	○		○	○					

	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔
	○	○	○	△	○
	○	○	○	△	○
	○			○	○
					○
					○
					○
	○	○	○		

※⑱の△は、花の争いではなく、金のまりで争う。㉓の△は、太陽と月がシャカナローの花で争う。

①『奄美大島与論島の民俗語彙と昔話』栄喜久元　奄美社　一九七一・八

②『吉永イクマツ媼昔話集』本田碩孝　昭和五九年　郷土文化研究会

③『与論島郷土史』　増尾国恵　昭和三八年　与論島教育委員会

④『大宜味のむかし話』大宜味村教育委員会　福地曠昭　昭和五五年　大宜味村教育委員会

⑤『沖縄の昔話』　福田晃・岩瀬博・遠藤庄治　昭和五五年　日本放送出版協会

⑥『伊良皆の民話』読谷村民話資料1　読谷村教育委員会　昭和五四年

⑦『儀間の民話』読谷村民話資料5　読谷村教育委員会歴史民俗資料館　昭和五八年

⑧『瀬名波の民話』読谷村民話資料4　読谷村教育委員会民俗資料館　昭和五七年

⑨『ふるさとの昔ばなし　具志川の民話』（一）　具志川市教育委員会　昭和五六年

Hosei University Repository

⑩『沖縄の民話資料』第二集　子どものための民話　沖縄民話の会編集委員会　昭和五四年
⑪『那覇の民話資料』第二集　真和志地区（一）　那覇民話の会　昭和五四年
⑫『那覇の民話資料』第二集　真和志地区（一）　那覇民話の会　昭和五四年
⑬『那覇の民話資料』第四集　首里地区　那覇民話の会　昭和五七年
⑭『日本の民話』（九州（二）沖縄）　有馬英子・遠藤庄治編　昭和五四年　ぎょうせい
⑮『与那国の昔話』　岩瀬博・冨里康子・松浪久子・長浜洋子　昭和五八年　同朋舎出版
⑯『多良間村の民話』多良間村役場　一九八一・三
⑰「琉球新報」　一九七六・六・一沖縄民話の会
⑱『竹富島史』上勢頭亨　法政大学出版局　一九七六・八
⑲NHK沖縄稿　NHK沖縄放送局　一九七九・四～八一・三
⑳NHK沖縄稿　NHK沖縄放送局　一九七九・四～八一・三
㉑「国吉瑞枝媼の昔話」　伊芸弘子　那覇民話の会
㉒「琉球新報」　一九七六・四。一六
㉓『喜界島昔話集』岩倉市郎　一九四三年　三省堂
㉔「鹿児島新報」一九六七・一二・二六

以上二四話を見ると、この話型は、弥勒と釈迦の①火種盗みと、②土地争いの二つの話に分類されて

いるが、もともとは同型の話が派生したと考えられる。この話型は日本本土では今のところ見ることができない。沖縄文化圏にしかない話である。

一　まとめ

このように見ていくと、韓国の創世歌は沖縄に伝承されている「ミルクとサーカ」の話と同型の話であることがわかる。そしてこの話型が日本本土に伝承されていないということは、仏教の布教の歴史的相違があったということに違いない。沖縄に仏教が入ってきた年代については、明らかでない。創建年代のわかっているもっとも古い寺は、一四三〇年に建立された那覇にある大安禅寺である。沖縄はその位置と外に向かって開かれた特殊性とによって、外来宗教の受容も多く、またその変容も激しかった。仏教だけでなく、漢民族に由来する信仰や習俗も多く受容されていた。そして固有の神観念であるニライ・カナイ、アマミヤ・シネリヤ、オボツ・カグラの思想があり、仏教の布教は日本本土のようにはいかなかったのではないだろうか。この弥勒と釈迦の話は、真摯な仏教徒には受け入れがたい内容となっている。しかし同様に仏教の入ってくることが遅かった奄美では、この話は断片でしか伝承されていない。弥勒に関する歌謡も、奄美にはみられない。韓国と沖縄を結ぶ線が考えられるが、実際朝鮮半島からの漂着民は昔から多かったようだ。[28] 古い記録を探すと、一四七七年二月に与那国島に済州島の人が漂着している。二年五ヶ月間与那国に滞在して、『李朝実録』という本を著

Hosei University Repository

している。そこで済州島との結びつきを考えたいところであるが、沖縄に伝承されている弥勒と釈迦の話は、むしろ韓国本土に伝承されている型に近い。近いというよりほぼ同型である。済州島に伝承されている「天地王ポンプリ」は、本来の神話素である弥勒は出てこない。派生した形と考えられる。そこからも済州島とのむすびつきというよりも、直接朝鮮半島との交渉があったと考える方が自然である。また漂着民は、済州島民だけでなく、朝鮮半島からそのまま流されるケースも多かったようである。

このように考えると、黒潮に乗った沖縄の弥勒信仰が、鹿島までたどりついたかどうかということが問題になってくる。その鹿島踊の源流が南島にあると考えるよりも、百済を経て日本に入ってきた弥勒信仰が、いくつかの拠点を中心に伝播していったと考えた方が自然なのではないか。それを担ったのは渡来人も含め、定住する事のなかった人々が関わっていたのではないだろうか。しかし沖縄の弥勒信仰に強力に結びついている米との関係については、つぎのように考える。もともとあった南島の海の彼方からやってくるという来訪神への信仰は、米と結びついていた。これは奄美大島龍郷村秋名で行われる平瀬マンカイにみられるように、海の彼方から稲霊を招いている。また奄美に伝承されている米ぬナガレには、ネリヤ・カナヤから鶴と鷹の鳥が、脇羽に押し込めて稲の穂を運んできたという詞章がある。[29] このような海の彼方からの神々が、豊かな実りを運んでくれるという思想が根底にあり、それに弥勒信仰が習合したと考えられる。それでは遠く離れた鹿島踊の詞章に出てくる米は、

いったい南島からの影響であろうか。韓国の殺霊信仰を見ると、雌綱、雄綱の綱引きや、稲作にまつわる祭りが各地にある。これらを持って日本にやってきたとは考えられないであろうか。鹿島の事触などによって各地に伝えられた鹿島踊は元来は疫神払いであったのが盆踊り化して残された。永田衡吉氏の「鹿島踊の考察」の中に、つぎのような文がある。[30]

しかし湘南二三ヶ所に鹿島踊が命脈を保っているのも、この旅塵にまみれた遊神人の布教と、生活を兼ねた周期的遍歴のおかげではないだろうか。重ねていうが、ある時代に、お盆月から秋口へかけて、湘南地帯の神社を目ざし舟行して奉賽にくる一団の神人があって、神社の庭で神懸かりして舞踏し、その年の豊凶を神慮にただし、さらに村の除魔、除災を祈禱した。はじめ歌上げ・太鼓・鉦の役は、その神人たちの神秘的な神わざであり、鏡や黄金柄杓の役は、その神託の聞き役であったかもしれない。

このように旅する人々によって、遠く朝鮮半島から渡ってきた弥勒信仰が、しだいに日本の各地に浸透していったのではないだろうか。

(1) 「みろくの船」柳田国男 (『弥勒信仰』宮田登編 雄山閣 昭和五九年四月発行) 三頁 五～七行
(2) 同右 三頁 八～九行
(3) 「ミロク信仰の流布と機能」酒井卯作 (『弥勒信仰』 同右) 五三頁 一五～一八行、五四頁

Hosei University Repository

一～五行

(4)「近世弥勒信仰の一面」和歌森太郎　(『弥勒信仰』　同右　)七三頁　一四～一八行

(5)同右　七四頁　三行～四行

(6)「鹿島踊の考察」永田衡吉　(『弥勒信仰』　同右　)　九二頁　三～四行、八～一二行

(7)同右　九三頁　二～六行

(8)同右　九六頁　一五行

(9)同右　九八頁　四～五行

(10)同右　九八頁　一九～二〇行。『風土記』岩波古典大系二「常陸国風土記」香島郡の記事に「卜氏の種属、男も女も集会て、日を積み夜を累ねて～」「神の社の周囲は、卜氏の住むところなり。」とある。

(11)「近世弥勒信仰の一面」和歌森太郎　(『弥勒信仰』　同右　)　七三頁　一五～一八行

(12)『日本民俗大辞典』福田アジオ他　吉川弘文館　平成一二年三月発行

(13)「弥勒信仰研究史の回顧と展望」宮田登　(『弥勒信仰』　(1)に同じ)
三〇八頁　四～七行

(14)『沖縄文化史辞典』真栄田義見他　東京堂出版　昭和四七年発行

(15)『琉球列島民俗語彙』　酒井卯作　第一書房　平成一四年四月発行

(16)(13)三〇九頁　四～一一行

(17)同右　三一〇頁　二〇行、三一一頁　一～六行

(18)『南島歌謡大成　全五巻』　外間守善他　角川書店　昭和五三年発行

(19)『韓国弥勒信仰の研究』金三龍　教育出版センター　昭和六〇年一月発行
二三二頁　一四行

(20)『広辞苑』布袋は唐代の禅僧であるが、弥勒の化身であると尊んだ。

(21)「組踊り以前」折口信夫　(『折口信夫全集第三巻』中央公論社　昭和四一年一月発行)三六〇頁
一一～一六行

(22)「沖縄採訪手帖」折口信夫　(『折口信夫全集第一六巻』中央公論社　昭和四二年二月発行)一四八頁
一一～一六行、一四九頁　五行

(23)『韓国の巫俗神話』金泰坤　集文堂　一五頁～一八頁

(24)「弥勒信仰と弥勒の世」安永寿延　((1)に同じ)一七七頁　一三～一六行

(25)『済州島巫俗の研究』玄容駿　(第一書房　昭和六〇年七月発行)二三二頁　一六～一八行

(26)「花郎制度の本質とその機能」三品彰英　((1)に同じ)二八六頁　六～一六行

(27)「韓国古代民族の海洋他界観」玄容駿　(『柳田国男研究』第七号　白鯨社　一九七四年発行)六一頁～七八頁

(28)『漂着・漂流からみた環東シナ海の国際交流』九州大学大学院比較社会学研究所(平成八年度科学研究費補

Hosei University Repository

助金研究成果報告書）六七頁「朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表」参照

(29) この羽の脇というのも意味がある。韓国に多く流布するアギザンス説話の主人公アギザンスも人間でありながら、脇に羽が生えている。

(30) （6）に同じ。一〇二頁　九～一三行